

児童の対話をする力を育む学習指導の在り方

－ 社会科における授業実践を通して －

藤田 裕貴

教育方法開発コース

1 テーマ設定の理由

中央教育審議会答申（2021）においては、次代を切り拓く子供たちに求められる資質・能力として、対話や協働を通じて新しい解や納得解を生み出す力などが挙げられ、これらを育むために、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点で授業改善を進めていくことが求められている。

筆者は日々の授業実践を通して、特に「対話的な学び」の大切さを感じてきた。そこで児童の対話をする力を育む学習指導の在り方を実践的に探るために本主題を設定した。本研究においては、正解のない問いを設定して児童間の異質性を生み出すこと、対話に自由に参加できる場づくり、対話をする際の心構えを養うことの3つの手立てを通して、児童の具体的な変容から有効性を検証する。また、現任校では「対話」を軸にした授業研究に取り組んでおり、提案授業や校内研修の場で自身の研究について共有を図ることが学校全体で「対話」を軸とした学習を充実させるために有効であると考えた。

以上のことから本研究では、児童の対話をする力を育む学習指導の在り方を追究することを視点1、現任校で上記の視点に基づいた提案授業や校内研修を行い、指導力の向上を図ることを視点2として研究を行うこととする。

2 基本的な考え方

（1）児童の対話をする力を育む学習指導について（視点1）

① 対話について

対話について、様々な人（異質性）と聞き合うことが意味の流れを生み、創造性につながるというボーム（2007）の理論を基に、本研究においては「異なる考え（価値観）をもつ子どもが集まり、一人ひとりの持つ意味（理由・価値）を話し、聴くことで、さまざまな考え（価値観）に触れ、一人ひとりが考えを深めたり、新たな考えをもったりすること」を「対話」と定義付けることとする。

そして、先述した2点の課題を踏まえ、対話をするために必要な2つの素地と児童の対話をする力を育むための学習指導における3つの手立てについて、表1にまとめた。

表1 対話をするために必要な2つの素地と学習指導における3つの手立て

対話をするために必要な2つの素地	学習指導における手立て
・異なる考え（価値観）がもてること	正解のない問いを設定し、学習者と協働学習者との異質性を生み出す
・自分の考えを話し、他者の考えを聴けること	対話に自由に参加できる場の設定 対話の心構えの意識づけ

以上の2つの素地を養えれば、児童の対話する力を育むことができるのではないかと考えた。そのため3つの手立てを基に実践していく。

② 児童の対話をする力を育むための学習指導における手立て

ア 正解のない問いを設定し、学習者と協働学習者との異質性を生み出すことについて

北川・平田(2008)や安野功(2005)らの理論を基に担当する学級の児童の実態を照らし合わせたところ、正解のない問いを設定することが有効的だと考えた。これからの社会を強く生き抜くためには自分で考え、他者の意見も柔軟に取り入れながら解決しようとする姿勢が重要になるだろう。そのため、正解のない問いを設定し、自分の考えをもつ、他者との関わりの中でその考えを磨き上げる活動を繰り返していくことで意見が違っていてもよい、自分で考えることが大切であることを感じてほしいと考えた。

イ 対話に自由に参加できる場づくりについて

ボーム(2007)の対話の場の設定に対する理論から、自分の考えを他者と共有しやすくするために自由に対話に参加できる場づくりの重要性を感じた。対話を通してグループの考えをまとめる、結論を出すということを児童に求めると、児童間の対等性は失われ、対話に自由に参加できる場ではなくなる可能性がある。そこで、本研究では輪になって対話をする環境を設定する。そして、対話グループでは、自分の考えを話し、他者の考えを聴くことに重点を置くこととする。

ウ 対話の心構えを養うことについて

上記に加え、対話における心構えを児童に身につけさせる必要があると考える。井庭・長井(2018)、ボーム(2007)の主張から下記に示す5つの対話における心構えを考えた。

- 1 いろいろな考えがあることを受け入れ、自分の考えが絶対に正しいという気持ちをなくすこと
- 2 友達の考えを批判しないこと
- 3 友達の話に耳を傾けること
- 4 気になったこと、疑問に思ったことは質問すること
- 5 友達を説得しようとするのではなく、ただ自分の考えを話すこと

(2) 提案授業や校内研修を行い、指導力の向上を図ることについて(視点2)

現任校では、「課題との対話」「仲間との対話」「自分との対話」の三つの対話をどう生み出すかという視点を基に、授業づくりに取り組んでいる。現任校がさらなる発展を遂げるためには、昨年度の職員アンケートから判明した課題である「仲間との対話」に着目する必要があると考えた。

先述した課題を解決する一助として、全教員で「対話」について考え、共通理解を図るための研修の機会を設けること、また、提案授業で具体的な実践を示すことが有効ではないかと考える。

3 視点1に係る実践の概要

(1) 授業実践の概要

児童の対話をする力を育てる学習指導の在り方を探るため、小学校第5学年社会科の「私たちの生活と工業生産」の小単元において、先述した3つの手立てを取り入れた授業実践を行なった。

(2) 児童の対話をする力を育てるための学習指導における手立て

①正解のない問いを設定し、学習者と協働学習者との異質性を生み出すについて

本小単元の終末に正解のない学習問題「これからの日本の工業はどのように発展していけばよいだろう」を設定した。既習内容から、これからの工業の発展のために大切だと思うことを3つ選択させた。そうすることで、児童が理由をふまえて考えられ、児童間に異質性が生まれるようにした。

②対話に自由に参加できる場づくりについて

友達との対話を基に学習問題への自分の考えを再考する活動を設定し、教室環境を対話の場と再考する場に分けて授業を行った。(図1) 児童は数人で輪になって座った。グループごとに対話をする→一定時間でグループのメンバーを入れ替え→対話することを繰り返した。少人数にすることで、相手の意見を聴きやすく、自分の意見も言いやすくなると思った。

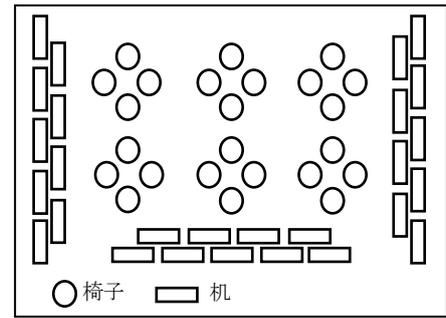


図1 第3次の6時における教室環境

③対話の心構えを養うことについて

児童に対話をする力の素地を築くために、次に示す3つの取り組みを行った。

ア あらゆる場面で児童一人ひとりが自分の考えを話し友達のを聴く機会を意図的に増やす。

イ 自分と友達は考えが違って当たり前だからこそ対話は必要であることを児童に伝え続ける。

ウ 5つの対話の心構えを確認してから話し合い活動に入る。

4 視点1に係る実践の考察

(1) 正解のない問いに対する児童の反応

正解のない学習問題「これからの日本の工業はどのように発展していけばよいだろう」に対して、全児童が自分の考えをもち、さらには児童一人ひとりが異なる考えをもつことができていた。意識調査の記述から、学級の80%の児童が、正解がない問題の方が考えやすいと答えた。考えを自由に表現できる、間違えないという安心感がその理由として挙げられている。

以上から、児童に自分の考えをもたせつつ児童一人ひとり異なる考えになるようにするためには、手立ての1つとして正解のない問いが有効であると考えられる。

(2) 対話に自由に参加できる場づくりに対する児童の反応

対話に自由に参加できる場づくり(図1)では、ほとんどの児童が活発に話し合っており、学級の75%の児童が、輪の形にして話す方が話しやすいと答えた。輪の形にすることでみんなの姿が見え、友達の意見が聞きやすくなること、対話へ臨む意欲が高まることが理由である。また、学級の70%の児童が、小グループのメンバーを入れ替え、対話することを繰り返すことが、自分の考えを話す、友達の考えを聴こうとする意欲の高まりにつながったと答えた。

以上から、児童が対話に自由に参加できる場づくりのために少人数で輪になって話し合うことが手立ての一つとして有効であると考えられる。また、対話グループでは何か決定を下さなかったことが児童の間に互いが対等であるという意識を生み、発言しやすい雰囲気がつくられたと考えられる。

(3) 対話の心構えに対する児童の変容

児童に対話をする力の素地を築くために、児童一人ひとりが自分の考えを話し友達のを聴く機会を意図的に増やし、その都度、対話の必要性を児童に伝えること、5つの対話の心構えを確認してから話し合い活動に入ることに継続して取り組んできた。その結果、自分の考えを話し、他者の考えを聴けるようになる児童が増えたと感じる。

話し合い活動における児童の様子の変容及び意識調査の結果から、本研究における取り組みで児童の対話をする力の素地を養えたと考えられる。

5 視点2に係る実践と考察

児童の対話をする力を育てる学習指導の実践にあたっては、まずは対話の捉え方について教員全員で共通理解を図ることが重要であると考え。そして、小学校6年間における学びの見通しや発達段階に応じて、目指す児童の姿や指導の工夫に関して教員が共通理解を図りながら授業改善に取り組むことも重要であると考え、校内研修と提案授業で自身の研究を基に共有を図ることとした。

(1) 校内研修の実施(2022年6月27日)

研修の流れは以下の通りである。

昨年度の研究内容 → 先生方のイメージする対話的な学びの姿と本校の課題 → グループ協議 → 共有 → まとめ

筆者は、筆者が取り組んでいる研究内容を押し付けるのではなく、先生方が対話への認識を捉え直し、深化させていくきっかけづくりをしたいと考えたため、今回は先に述べたような提案をした。校内研修後のアンケートには、対話のイメージを共有できたことに対する肯定的な感想等が挙げられ、筆者のねらいは達成できたと考えることができる。

(2) 提案授業の実施(2022年11月23日)

授業において児童の対話する力を育む学習指導をどのように実践しているのかを示すため、現任校で開催している教育実践発表会に合わせて、提案授業を行なった。提案授業を参観していただいた現任校の教員からの意見から、筆者が4月から取り組んできた活動の成果が見えたように感じた一方で、児童の対話をする能力をより高めていくための課題が見つかったのでこれからの筆者の教員生活の中で新たな手立てを模索していきたい。

6 研究の成果と今後の課題(視点1, 視点2)

児童への意識調査や学習に対する態度の観察等から対話することへの児童の意識の高まりを感じることができたため、本研究における3つの手立ては児童の対話をする力を育むために有効だったといえるだろう。しかし、意識の高まり=学びの深まりと捉えてよいのかは疑問が残る。学びが深まることでより意義のある対話をする力が身についたといえるのではないだろうか。学びを深めるためには、児童自身が自分の考えに固執しすぎず柔軟にさまざまなことに取り組む力を高めるとともに「問う力」と「聴く力」も高める必要があると感じた。また、児童に対話することの必要性を感じさせるために学習過程の工夫が必要であると痛感した。学習過程を工夫することで児童の中の対話をすることの必要性はより高まるだろう。

引用文献

- 中央教育審議会. 2021. 『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～(答申)」
- デヴィッド・ボーム. 2007. 『ダイアログ 対立から共生へ、議論から対話へ』(英治出版)
- 安野功. 2005. 『社会科授業が対話型になっていますか』(明治図書)
- 北川達夫・平田オリザ. 2008. 『ニッポンには対話がない』(三省堂)
- 井庭崇・長井雅史. 2018. 『対話のことば オープンダイアログに学ぶ問題解消のための対話の心得』(丸善出版)